

都市の色彩表徴と民俗文化

小林忠雄

1 問題の所在

3 都市の色彩表徴と民俗文化

2 伝統都市における民俗的色彩の事例

論文要旨

日本人の色彩感覚に基づく文化および制度や技術の歴史について、これまで多くの研究が行われてきたが、本稿では主として日本の民俗文化において表徴される色彩に焦点をあて、その民俗社会の心意的機能、あるいは庶民の色彩認識についてのアプローチを試みたものである。

特に都市社会において顕著な人為的色彩は、日本の各都市において様々な諸相をみせ、ここでは伝統都市として金沢、松江、熊本の各城下町を対象に、近世からの民俗的な色彩表徴の事例を現地調査および文献を参照しながら考察し、その特徴を引き出してみた。

その結果、白色をベースとした表徴機能、赤色、赤と青色、藍色、紫色、黒色、五彩色といった色調の民俗文化に都市的要素を加味した展開のあることが見出された。

金沢と熊本の場合は民俗事例と藩政期からの伝承により、松江はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の『日本警見記』の著作を通して、明治初年の事例とハーンの見た印象をてがかりに探ってみたものである。

また、都市がなぜ民俗的な色彩表徴の機能を前提としているかについての疑問から、建築物、あるいは染色、郷土玩具といった対象によって、多少、問題アプローチへの入口を見出し得たと思われる。

都市は日本の社会構造の変革をもっとも端的に表出する場であるため、モニュメント、ランドマーク、メディアの変化など外側の表徴だけでも、その変容の速度は著しく、従って色彩の記号化も激しく変化するが、しかしそうであっても日本人の基本的な色彩の認識は変わっていないという前提にて、都市のシンボルカラーを捉えねばならないと考える。

それはまったく日本の民俗文化の枠を越えてはいないからであろう。